

資料紹介 ヤオの神像画 1

—十殿と地府—

廣田 律子

中国湖南省藍山県で実施される「還家願儀礼」において儀礼項目の「還招兵願」の小項目「献酒」の際に、祭司によって漢字経典『請聖書』（ヤオ族文化研究所文献番号 A-11）の「請下大廳四府」部分が誦唱される。四つの世界である四府（天府・地府・陽間・水府）の中の地府に関して次のような記述がある。（ファイル名：IMG_1172～1173）

地府

地府一界金剛坐神	地府一界自善神王
地府一界四山真君	地府一界地獄聖帝
地府一界一殿奏廣冥王	地府一界二殿初降冥王
地府一界三殿宋帝冥王	地府一界四殿武官冥王
地府一界五殿閻羅天子	地府一界六殿變成冥王
地府一界七殿泰山冥王	地府一界八殿平等冥王
地府一界九殿平厘冥王	地府一界十殿轉輪冥王
地府一界鑒齋鑒醮運錢礼使者 ¹	

「還招兵願」では招いた神々に酒や紙銭（紙製の銭）を献じるが、そのときに神々に関係する内容が述べられている経典が誦唱される²。ここでは地府にある十の神殿にいるとされる十人の王の名が連ねられている。

儀礼の実践では、祭場中央の机上に碗が十個置かれた箕と馬蹄形に酒杯が八個並べられる。さらに少量の飯を包んだ笹の葉や豆腐も置かれる。碗や杯に酒がたびたびつがれる。

祭司の二名の弟子が左手に法具の玉簡の上に杯を置いてもち、右手に鈴をもって舞う。

祭司により紙銭も積み重ねられ、後に燃やされる。これは、以前願掛けのと

きに約束した額を献上するためである。さらに酒や紙銭を神々によって受け取ってもらえたか否か祭司が卜具を使って確かめる。

この祭祀の対象となっている地府にいとされる十王が描かれた神像画（十殿・十皇・十王）がある。神像画は「還家願儀礼」、「度戒儀礼」等の祭壇にその他の神像画と共に壁に掛けられる³。地獄で苦しむ祖先を救済する「拆解儀礼」では、祭場中央にこの神像画一枚が置かれ、その前で儀礼が進められる。

本稿ではヤオ族文化研究所所蔵の中国およびベトナムの祭祀で使用されていた複数の十殿・十王・十皇と称される神像画を紹介したい⁴。

この神像画の構成は基本的には一軸に左右に上から下に一殿ずつ五名の王を配し中央に地獄での亡者への責め苦の様子が描かれる。王は官吏の風貌をし、筆や笏をもち、文書も描かれ地獄の裁判官を表している。ものによっては十王がまとめて描かれた下に責め苦が描かれたり、数人に絞った王を描いた下に責め苦が描かれるものもある。

十殿にはそれぞれ管轄する王の名前が書かれている場合があり、この名前は漢字經典の地府にある一殿から十殿に配される王の名と一致すると考えられる。ただし必ずしもそうではない場合もあり、王名の漢字の単純な違いや順番の違いだけでなくまったく別の王名が見られたりする。經典の初降王は初江王や楚江王に、武官王は伍官王に、平等王は平政王に、平厘王は都市王という具合である。

地獄の責め苦に描かれるのは、のこぎりでひかれる、舌が抜かれる、臼でひかれる、杵でつかれる、釜ゆでにされる、針の山に登らされる、火の中に投げられる等という内容である。その他に生前の所業を映し出す孽鏡、生前の行いを量る秤、責め苦に追い立てる獄卒、転成する世界を描いた五趣生死輪、橋を渡る善行の人と橋の下の流れに浮き沈みする悪行の人、地獄巡りで有名な目蓮とその母らしき人物、地獄を表す鄧都の文字等も描かれる。

以下に道教・法教系の儀礼の実践をまとめた書籍に見える十王図・地獄図を紹介し比較を試みる。

一、中國傳統科儀本彙編 2『浙江省磐安縣樹德堂道壇科儀本彙編』徐宏圖編
新文豐出版公司1999年 pp.204-207

一殿秦廣王、二殿楚江王、三殿宋帝王、四殿伍閔王、五殿閻羅王、六殿卞城王、七殿泰山王、八殿平等王、九殿都市王、十殿轉輪王が、それぞれ一軸に一

殿ずつ描かれ、裁判官としての王とその下に責め苦にあう亡者が描かれる。孽鏡や犁にひかれる、血の池や油地獄、のこぎりびき、五趣死生輪等が描かれる。

二、中國傳統科儀本彙編12『浙江省永康縣道壇青詞科儀本彙編』徐宏圖編
新文豊出版公司 2007年 pp.249-252

秦廣王、宋帝王、閻羅王、泰山王、都市王、楚江王、五官王、卞城王、平等王、転輪王がそれぞれ一軸に一王ずつ描かれ、裁判官としての王とその下に責め苦にあう亡者が描かれる。白びき、のこぎりびき、血池、杵びき、釜ゆで、針の山、五趣死生輪等が描かれる。

三、中國傳統科儀本彙編3『四川省江津市李市鎮神霄派壇口科儀本彙編 上』
段明編 新文豊出版公司 1999年 pp.193-194

秦廣殿、楚江殿、宋帝殿、伍官殿、森羅殿、卞成殿、泰山殿、平政殿、都市殿、転輪殿がそれぞれ一軸に一殿ずつ描かれ、裁判官の下に責め苦にあう亡者が描かれる。白びき、釜ゆで、のこぎりびき、針の山、孽鏡、橋等が描かれる。

四、中國傳統科儀本彙編9『上海南匯縣正一派道壇與東嶽廟科儀本彙編』朱建明等編 新文豊出版公司 2006年 pp.432-434

一殿秦廣王、二殿楚江王、三殿宋帝王、四殿伍觀王、五殿閻羅王、六殿卞城王、七殿泰山王、八殿平等王、九殿都市王、十殿転輪王が五殿ずつ二枚の布に五王が裁判を行う様子が並べて描かれている。王の下に責め苦を受ける亡者が描かれるが、白にひかれる、杵でつかれる、舌を抜かれる、ヘビにかまれる、熱柱を抱かされる、氷に閉じ込められる、雷に打たれる、五趣死生輪等が描かれる。

五、道教儀式叢書2『師道合一：湘中梅山楊源張壇の科儀與傳承 下冊』呂永昇等編 新文豊出版公司 2015年 pp.1584-1586

一殿秦廣王、二殿楚江王、三殿宋帝王、四殿、五殿は王名がなく、六殿卞成王、七殿は王名がなく、八殿平政王、九殿は王名がなく、十殿転輪王と、一軸ずつに最上段に五名の神々、中段に一名の裁判官が描かれ、その下に責め苦を受ける亡者が描かれる。責め苦には、釜ゆで、衣を剥がされる、白でひかれる、舌を抜かれる、のこぎりでひかれる、針の山、ヘビに巻かれる、孽鏡、五趣死生輪等が描かれる。

ヤオの十殿および各地の漢族の道教や法教の十殿を見てみると、ヤオの場合は一枚に十殿すべてが描かれており漢族の場合は各殿ごとに分けられて描かれ

ているという違いがある。

内容については各殿の王は王名も共通し、亡者の生前の行いに対して裁判を行う様子が描かれ共通する。十王の審判を受け亡者は罪囚として獄に送られ、刑罰を受けるが、この責め苦の内容も一致し、生前の所業を映す孽鏡や転生を示す五趣死生輪等も同様に描かれる。

ここには地獄の共通認識、共通する世界観が存在する。この同一性は、日本で描かれる地獄絵にも見られる⁵。

ただヤオの地獄の責め苦には、氷や血の池地獄、亡者の舌が伸ばされた上をウシが犁をひくといったものは見いだせない。ヤオ自身が描いたかまたは漢族の絵師に依頼して描いたかも反映されると思うが、ヤオの生活にないものは絵の上に描かれていないのかもしれない。

また血の池地獄が描かれないのは、出産や月経の血を不浄とし女性専用の責めが必要とする観念がヤオには存在していないことの表れと考える。ヤオの通過儀礼の実践において、最高位の祭司の資格を得る度戒儀礼では、男性だけでなく夫人も共に受礼することからも女性を差別するような思考は描かれないと考えられる⁶。

ヤオと各地の漢族の道教や法教の十王図・地獄図からは、亡者は十人の裁判官によって生前の所業に照らし裁きを受け、罰が決められ、種々な刑を受け、その後転生するという地獄観が見て取れ、責め苦の表現の差異こそあれ、共通性が確認できる。

ただヤオの神像画の図上には地獄が描かれるものの、漢字經典には四府の中の地府に十王の名の記述はあるが、具体的な王の役割や地獄の世界の様子を詳述する文面を見いだせない。

中国藍山県のヤオの実施する葬送儀礼で用いられる『度亡書一本』（ヤオ族文化研究所文献番号 Z-8、ファイル名 khi20111117IMG_0677～0722）には、「故亡師帰陰府（死者は陰府に帰る）」とあり地府の十殿の記述はない。「斎戒血盆報娘親」とあり母の月経や出産の血の汚れ血盆を遺族が清めようと考えていることが見える⁷。

例えば、五、に挙げた湘中梅山楊源張壇の場合、經典『拾王大懺全卷』には十王殿ずつに詳しい説明があり、亡者の生前の所業とそれに対応する罪が述べ

られ、その刑罰の内容が詳細に述べられている⁸。

ヤオの場合、四府という空間を重視し、そこに存在する神々を儀礼に取り込むためにその名を經典に記述し、儀礼の実践の対象として挙げるにとどまっている。亡者の生前での所業に照らし刑罰を決める十王の職分に関する詳しい記述は見えない。ただし儀礼に飾る神像画に地府を表現するにあたっては、漢族の道教や法教の地獄図を当てはめたといえる。神像画製作にあたって当初は漢族の絵師が介入し、ヤオの風習や信仰を重んじつつも、漢族の地獄図を反映させて仕上げたのではと想像する⁹。

ヤオは漢族の地獄の王を自身のパンテオンに取り入れるのだが、ヤオ独自の死者の世界に対する解釈が存在し、儀礼の実践対象として十王を取り込むにとどまっているといえ、經典と神像画の世界観は完全には一致していないように見える。



hs01_017 ベトナム神像画 無題



hs01_034 ベトナム神像画
一殿秦広王～十殿転輪王



ys01_067 中国神像画 十皇殿



ys01_070 中国神像画 十殿冥王



ys01_090 中国神像画 十殿



ys01_050 中国神像画 十殿



タイのヤオの地獄で苦しむ祖先を救済する儀礼

¹ 道教と仏教が混在する地獄の解説書の『玉歴至宝鈔』には「第一殿秦広王 第二殿初（楚）江王 第三殿宋帝王 第四殿五官王 第五殿閻羅王 第六殿变成（卞城）王 第七殿太（泰）山王 第八殿平等王 第九殿都市王 第十殿五道転輪王」とある。

² 神奈川大学歴民調査報告第14集『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』神奈川大学歴史民俗学科学研究科 2012年 p.72、「還家願儀礼程序」577行12/18 16:46 参照のこと。

³ 『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』p.31、祭場平面図 参照のこと。

⁴ 一般社団法人ヤオ族文化研究所ウェブサイト内の公開版ヤオ研データベース—静止画—（<https://www.yaoken.org/data-room/pubDB/>）に今回紹介する神像画hs01_017、hs01_034、ys01_067、ys01_070、ys01_090、ys01_050は収められている。ファイル名で検索する場合、ハイフンとアンダーバーの違いに注意すること。

ファイル名がhs01から始まる画像は、静止画分類番号「hs-01」にまとめられ、同様にys01から始まる画像は静止画分類番号「ys-01」に掲載されている。

⁵ 廣田律子『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 2011年 pp.502-504

⁶ 丸山宏が「ヤオ族度戒儀礼調査の所感と研究課題」『瑶族文化研究所通説』第1号 ヤオ族文化研究所 2009年 pp.16-17で「私の知る現在の台湾南部の道教も天師道に属するが、しかし夫婦一対になって入門者として入門式に参加し、ともに資格獲得をし、かつ何らかの男女の和合を象徴する行為をすることまでは行われていない。ヤオ族度戒儀礼においては女性入門者にも印や陰據・陽據等の資格証明書が授与される。こうした事実から女性の位置は非常に興味深いものがあると感じた。」と指摘している。

⁷ この血盆については、南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団収集文献の1953年に書写された『目連救母解厄経書』（白鳥番号JC10083、ヤオ族文化研究所文献番号10-21、ファイル名DSCN7437~7465）に見える。

目連が地獄巡りをし、女性がお産の不浄な血により諸神を汚すことになり罰として血盆地獄の責め苦を受けるが、遺族が血盆経を唱えることによりそこから救われることになると知るといふ内容が述べられている。ここには中国の民間に広く知られている『目連救母』の話と血の池地獄が見える。これについては博論『中国民間祭祀芸能の研究』の第五節 目連救母と女性救済（pp.496-509）で述べたのでここでは述べない。このタイの經典には地獄の責め苦を受ける原因が述べられている点で特別といえる。

⁸ 道教儀式叢書2『師道合一：湘中梅山楊源張壇の科儀與傳承 上冊』呂永昇等編 新文豊出

版公司 2015年 pp.615-647

⁹ 内海涼子「ミエンの小軸神像画が伝える神話と伝説」『瑶族文化研究所通説』第8号 ヤオ族文化研究所 2021年 pp.27-41ヤオの神像画の絵師について詳しく論じている。